



飼料米を与え、品質向上を目指す「TOKYO X」

ブランド豚「TOKYO X」

飼料米で品質向上へ

TPPに危機感、差別化図る

東京生まれのブランド豚「TOKYO X」に飼料米の餌を与える試みを、多摩地区などの生産農家と、小売業者などでつくる流通団体が始めた。米を食べた豚の肉はうまみが増すとされる。環太平洋経済連携協定(TPP)をにらみ、市場での競争力を高める狙いだ。

試みは、多摩地区など一部の生産農家で5月にスタート。非遺伝子組み換えのトウモロコシや大豆などの餌に、飼料米を15%混ぜて与えるようにしている。

流通団体「TOKYO X Association」(立川市)の植村光一郎会長は「脂質が光沢のあ

るピンク色に変わり、粘り気が出て口溶けが良くなる」と期待を寄せる。肉質もあっさりしたものに仕上がるといふ。

飼料米は豚の摂取カロリーを増やすため、腸内にたまったガスが血流に乗って脂肪に沈着し、肉に獣臭さが残る欠点もあるという。

そこで、牧草の粉や小麦のぬかなど、食物繊維を多く含んだ飼料も与え、新陳代謝を促して雑味を取る工夫もしている。

同団体は9月末に試食会を開き、食味の評判が良ければ、26戸ある全ての生産農家で導入に踏み切りたい考えだ。飼料米には国から補助金が出るため、飼料代はトウモロコシと比べ、1.5割高い程度に収まるといい、豚肉の出荷価格にも大きな影響はないという。

飼料米による品質向上の狙いは、安価な製品との差別化だ。おいしさと安全性にこだわる「TOKYO X」の小売価格は、一般的な豚肉の1.5倍。加工によつては7割高となる。TPP交渉では、政府は豚肉を関税撤廃の例外とすることを目指しているが、海外から安価な加工肉製品が入れば、さらに状況は厳しくなる恐れもある。

同団体は、「TOKYO X」の食味などに関する消費者のニーズを生産農家に伝えて、品質の改良を図

っており、飼料米を与えた豚についても同様の取り組みを進める計画だ。植村会長は「国内の畜産業界はTPPに強い危機感を持っている。生き残り戦略のモデルとなるような取り組みをしたい」と話している。